画像言語

室伏　武

絵画とは、一つの仮象である。それは眺めるためにあるので、手にふれるためにあるのではない。また、目に見えるその空間がどんなに広大でも、聞くための音響的属性はもっていない。そのなかの仮象として実物のように見える色の積量は、物体の存在をはかるための常識的な基準には合致しない。それはただ、視覚のためだけに存在する。絵画全体が、一つの純視覚的空間である。それは幻像（ヴィジョン）以外の何物でもない。

――S・K・ランガー著　池上保太、矢野萬里訳『芸術とは何か』岩波書店　一九六七年　三四―三五頁（岩波新書）

一　視覚的象徴としての画像

武伏室

画像（picture）とは、視覚的な伝え合いの媒体であり、それは画像情報（picture information）と呼ばれるものである。具体的には、写真、絵画、デザインなどを言うものである。この情報としての画像は、その対象である事物に関

する情報が類似的に描かれた仮象である。それは、事物を「写す」ことであり、画像的空間を構成する。この画像的空間は、事物の表象（representation）であって象徴形式である。この象徴形式としての画像的空間は、「虚像」としての空間であり、視覚的仮象であると言うことができる。このような画像は、事物が写された空間体系であり、それは形象形式（iconic form）であると言うことができる。この形象形式は像（イメージ）であり、沈黙の世界である。したがって画像は、言語を伴うことによって、はじめてそれが具有している情報を伝えることができる。

この画像情報は、人間の歴史において最も古い記録された情報であり、人間相互の伝え合いにおける基本的な媒体である。われわれの日常生活における実用的なものから、芸術作品に至るまで広い範囲にわたっている。現代の情報の時代において画像は、多様化し著しい発展を遂げようとしていると言うことができる。そこには、画像の文化が形成されている視覚的世界が展開されていると言って過言ではない。

この画像の研究は、したがって実用論から芸術論までにわたっている。近年、画像を視覚的言語として解明しようとする傾向にある。画像を記号体系として明かにしようとするものである。こうした傾向は、画像コンピュータの開発や、それに伴う情報学、情報科学、記号学などの発達によって画像学が形成されようとしている。また、学校教育における画像の教育的利用とその理解と表現の能力・技能の教育が重要な課題となってきたことなどによるものである。

これまで画像の研究は、象徴哲学からS・K・ランガー（Susanne K. Langer）[1]、非言語コミュニケーションのJ・ルーシュ（Jurgen Ruesch）とW・キース（Weldon Kees）[2]、一般記号論のC・モリス（C. W. Morris）[3]、画像論のJ・J・ギブソン（James J. Gibson）[4]、ジェイムス・Q・ノールトン（James Q. Knowlton）[5]やR・ハリソン（R. Harrison）[6]などの研究がある。これらの研究は、これからの発展に期待されることが多いものがあると言うことができる。それ

は、画像の本質の多様性と形象形式の有機性などによって絵画コードなど記号体系の確立に困難な点があると言うことである。本稿は、言語としての画像の本質を明かにするとともに、教育的利用、理解と表現の能力・技能の教育について、その基本的な理論的基礎を究明しようと試みようとするものである。

(一) 形象形式としての画像

視覚的な伝え合いにおける画像情報は、「像 (icon)」を媒体とするものである。この像は、象徴形式の一つであり、画像の対象である「事物」に関する外的な情報を「写す」ことによって「記録」されることにおいて表象化される。それは、非言語系の象徴形式であり、事物の写しとしての「仮象」である。この仮象は、「絵」の技法によって写された事物の空間的な「姿」であり、それは、虚像である。この姿は、事物に対する「心的画像」を絵画コードと言われる記号体系によって表現されたものであって、画像体系として存在している。

このように画像は、その対象である事物を写すことであり、有機的な全体像としての像の姿である。それは、その対象である事物と、記号体系によって構成された画像との間に「類似性」が見られると言うことである。この事物に対する類似性は、画像の本質であると言える。この類似性は、写すということによるものであって、それは、絵画コードによって表現されたものである。したがって、この像は、「記録された事物」であると言うことができる。

(1) 「写す」こと——心的画像

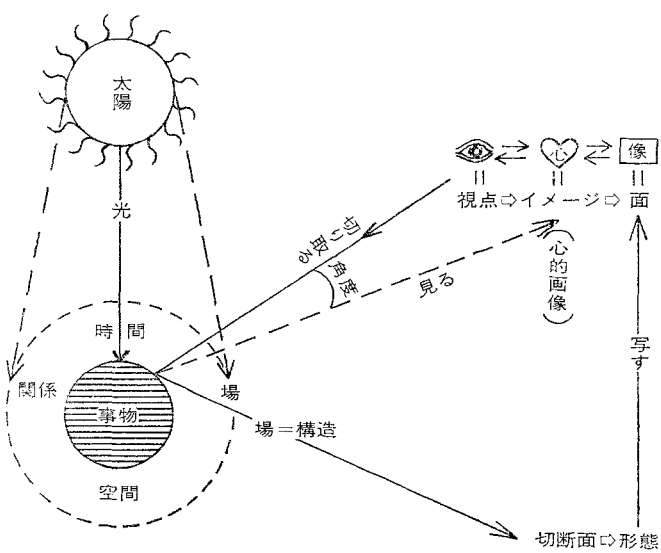
この画像は、記録された事物であり、それは事物の写しとしての仮象である。この写すということは、事物が具有している情報を絵画コードによって表現したものであると言える。このようにして画像は、事物が再構成されたもの

である。

画像の対象としての「事物」は、それをとりまいている特定の時間、空間や、それらとの関係によって存在している。このように画像は、「場」において存在している。この事物は、人間の社会において、太陽の光に照しだされた状況下における「実像」として存在している。つまり、事物は、事物であり、現実に存在するものである。

このような画像は、事物に対してある視点から事物が切り取られたものである。この切り取りは、送り手が、その視点から心的画像として切り取った面である。このイメージとしての心的画像は、視点と事物とその方向や角度などから成り立つ構造＝場としての切断面である。この切断面は、像として形態（gestalt）であり、仮象である。この形態としての面は、それを記号体系によって写し、記録したものである。そして、送り手は写し方によって、さまざまな画像が創造される

図 1　写す（画像の生成）



ものである。したがって、受け手は、「見る」ことによって画像を読んでいる。(図1参照)

このように画像は、心的画像を写すことによって成り立つものである。この写すということには、手で「描く」、写真を「撮る」などの手法によって行なわれる。この「写し方」には、事物をそのままの像を写し取るものである「写実」と、事物を模倣して写したものである「類似」、そして事物を簡潔に抽象化して写したものである「象徴」ないしは「記号」などのものがある。それは、切り方とその写し方による差異であると言える。

この写された画像は、したがって、事物に関する情報を絵画コードとしての記号体系によって構成されたものである。この記号体系は、画像を構成する方法であり、事物の写し方であると言うことができる。それは、画像を構成する単位と、それを「空間的配置」、そして「順序づけ」「修辞」によって成り立っている。この「空間」は、記号体系によって形態的な存在であり、「像」として成り立つものである。

(2) 「記録」すること——表現技法

このように画像は、事物を写すことによって成り立っている。それは、記録することであると言うことができる。この記録は、画像を構成する記号体系によって、事物を写す技法によって行なわれるものである。つまり、それは、心的画像を「描く」ことであり、「撮る」ことである。その結果として、画像が成り立つと言うことができる。

この記録の仕方は、「描く」ことによって絵画、デザインなど「絵」が作成される。これらには、手書きのものと、それが印刷されたものがある。また、「撮る」という写真的手法によって「絵」が作られる。それは、写真、スライド(フィルム、こまスライド)、絵ハガキなどである。このように記録されることによって画像が構成される。この描く、撮ることによる表現技法である、と言うことができる。このようにして画像が構成される。

（二）画像の本質

このように画像は、事物に対する心的画像を絵画コードとしての記号体系によって写されたものである。この写しは、記録された事物であり、「像（イメージ）」として存在している。したがって、この画像は、その対象である「事物」と「像―仮象」との間に類似性があり、それは、全体像としての形態である「姿」である。この画像は、象徴形式であり、それは、形象形式であると言うことができる。

(1) 面――形象形式

画像は、事物をある視点から心的画像によって切り取ったものであり、それは「面」としてのイメージが構成されている。この切断面は、事物とそれをとりまいている時間、空間、関係などの場において存在していた事物の外面を、面として取り出したものである。この面は、したがって事物の像の写しであり、時間、空間、関係を解放してしまう結果になる。別の言い方をするならば、画像は、事物の外皮を切り取って、その中から取り出した一枚の面であると言うことができる。

(a) 静止した面（静画）　このように事物から切り取った面は、その対象である事物が存在している状態の中から切り取ったものである。それは、時間、空間、関係における場のすべてを停止したものであり、それらを面の中に封じ込めてしまったものである。その結果、この切り取った面は、静止した面として心的画像を再構成したものである。このように画像の本質は、「静止した画面」であると言うことができる。

(b) 平面（一次元の世界）　この切断面は、事物の切り方によって「面」を構成しそれを写すことによって再構成

されたものである。この面は、静止した面であり、それは平面としての性格を持つものである。それは、事物の「姿」をそのままの像を写したものであるからである。この事物の表面の写しは、一次元の世界であると言うことができる。その結果、この面は、二次元、三次元や動きの世界を切に希求することになる。この限界を打ち破ることにおいて、芸術の世界が生まれることになると言うことができる。

(c)　類似性（写しの世界）　この事物の切断面は、事物の表面をそのままの姿で写し取ったものである。この再構成された画像は、その写しと対象との間に類似性があるということである。この類似性は、形象形式と呼ばれるものであり、それは画像の本質であると言うことができる。この形象形式は、事物そのものではなく、事物に関する情報を心的画像に基いた表象作用によって再構成したものである。この表象作用は、事物の外形を写し取って画像として再構成することである。

この類似性は、画像を構成する絵画コードとしての記号体系によって生ずるものであり、記号体系の特性であると言える。それは、「像」として事物の写しの世界である。

(d)　形態（ゲシタルト）　このように画像は、対象としての事物と類似した仮象であり、虚の空間である。それは、一つの全体像として構成されたものである。つまり、画像は、形態的存在であると言うことができる。この形態としての面は、絵としての総体的な像である。それは、形＝姿としての像であると言うことである。

このような「像」は、画像としての姿＝事物との類似したイメージのすべてである。それは、意味系の象徴形式ではなく、形態＝姿としての仮象において事物を伝えるものであると言うことができる。それは、事物を切り取って絵として再構成したものである。

(2) 像――視覚的象徴

この面としての画像は、形象形式であり、事物の写しである。それは、形態的存在であって全体像であると言うことができる。この「像」は、したがって事物の写しによって視覚化されたものである。この視覚的象徴としての画像は、事物の表象作用によって絵画的手法による形象形式である。それは、写された事物としての姿である。

(a) 画像情報　この形象形式としての画像は、面としての像の形式において存在している。この像は、事物が具有している情報を絵画コードによって写すことによって再組織化されたものであると言うことができる。それは、画像情報と呼ばれるものである。

画像としての情報は、写された事物像であり、事物が具有している情報と類似した情報としての性格を持つものである。この類似的情報は、事物の外形としての像が持っている本質な面において似ていると言うことである。この類似性は、事物的情報に対する送り手の心的画像としての情報との関係であり、それらは、本質的な特徴において似ていると言うことである。それは、写し方の問題である。

次に、この画像情報は、写された事物像であり、それはその姿として伝えられるのもである。この画像は、言語のように意味を伝えるものではなく、絵として存在するものである。それは、沈黙の世界の中にあると言うことができる。この画像は、したがってその情報が伝達されるためには必ず「言語」を伴うことによってはじめて達成される性質を持っている。つまり画像は、本来、画像＋言語の様式であると言うことができる。それは、画像が伝えたいとすることを言語の助けをかりて表現することである。このことは、画像情報の特徴であると言うことができる。

そして、この画像における情報体系は、画像を構成する絵画コードとしての記号体系である。したがって、画像情

報は、それを「見る」ことによって理解するとともに、それを記号体系を使って表現する。それは「写す」（描く、撮る）ことによって構成される。この画像の理解と表現は、記号体系によって行なわれるものである。

このような画像における情報体系は、空間的体系であり、視覚的象徴であると言える。それは、「見る」ことによって画像を理解する。「描く」ことによって画像を表現することである。つまり、画像の読み＝書きであると言うことができる。

(b)　視覚的象徴　このように画像は、視覚的象徴として、その対象としての事物を視覚的に表象化したものである。それは、事物を視覚的に抽象して表現された形式であると言うことができる。この絵画的な表現形式は、言語のように事物を論理的に「述べる」ことであることに対して、事物を感情的に「写す」ことである。つまり、画像は、感情形式であり、絵としての現示的形式であると言うことができる。

この視覚的象徴は、絵としての像によって提示されるものである。それは、画像それ自身が伝達すべき内容を持っている画像情報が「無言」のまま展示されているにすぎない。この無言の画像は、その受け手がそれを「言語的統一」することによって体制化されるものである。つまり、画像情報は、受け手の認識によって独自に理解されるものである。また送り手の画像情報の表現は、その主体によって主観的に表象することによって行なわれる。それは、送り手の主体的な言語統一によって画像が表現されると言うことができる。このように視覚的象徴としての画像は、事物を写した虚の空間体系であり、画像情報は、形象形式である。この画像体系は、事物を心的画像によって、記号体系を用いて表現されたものである。それは、写された事物としての本質を持つものであると言うことができる。そして、この無言な像は、言語的統一によって理解され表現されることに本質がある。

(三) 画像の分類

このような視覚的象徴としての画像は、形象的形式であり、その姿は、その対象としての事物に対して類似している。この類似性は、事物の写し方によって、そのままの姿を写すものや、その姿の本質を類似的に写したもの、そして姿を象徴化して記号として写すものなどによって差異が生まれ、特性を具有することになる。これらの姿は、形態として最もよくその特徴を明かにすることができる。

この画像の分類（taxnomy）は、画像としての形態によって分類することができる。ジェイムス・Q・ノールトン[7]は、画像の構成要素と、形象形式との組み合せによって分類している。画像は、その構成要素（e）とその要素の配置の型（p）、そして要素の順序づけ（c）の三つの要因と、形象形式である形象的形式（I）と、論理的形式（A）、そして象徴形式（X）との組み合せによって画像の型が3×3×3＝27の理論的な型があるとしている。そして、画像の形式には、現実的画像（realistic pictures）、類似的画像（analogical pictures）、論理的画像（logical pictures）の三つの様式があるとしている。（図2参照）

これらの画像は、現実的画像として「写真」として体系を、類似的画像として「絵画」の体系を、そして論理的画像は、「デサイン」としての体系を形成している。これらは、画像体系としての知識体系であると言える。

(1) 現実的画像――写実の体系

この現実的な画像は、対象としての事物を詳細で完全に写されたものであり、具象的な表現型式である。この写実的な手法は、事物について直接的に工学的手法によって写すことで表現されるものである。具体的には、「写真」に

図 2　視覚的象徴の論理的型（J. Q. Knowlton 説）

	e p c	e p c	e p c
現実的画像 (realistic pictures)	I-I-I	I-A-I	I-X-I
	I-I-A	I-A-A	I-X-A
	I-I-X	I-A-X	I-X-X
類似的画像 (analogical pictures)	A-I-I	A-A-I	A-X-I
	A-I-A	A-A-A	A-X-A
	A-I-X	A-A-X	A-X-X
論理的画像 (logical pictures)	X-I-I	X-A-I	X-X-I
	X-I-A	X-A-A	X-A-A
	X-I-X	X-A-X	X-X-X

よって代表される光学的方法によるものである。それは、事物の持っている情報をそのままの姿で再現する方法である。

この事物を視覚的な実在として表わす技術としての写真は、レンズを通して開ける視野にある事物を切り取ったものである。それは、最も写実であり、詳細に事物を再現できる手法である。それは、「事物の写し（copy）」であると言うことができる。この事物の写しは、事物がレンズを通して投影された姿が、光学的手法によって記録したものである。

この具象的な画像は、事物に関する視覚的情報が完全な形で表現されたものである。この事物をとりまいている時間、空間、関係やその総体である場を画像の中に封じ込めてしまうことである。別の言い方をするならば、画像は、時間、空間、関係や場を、それらの枠組みの中から取り出したものである。この画像は、「写された事物」の世界であると言うことができる。

(2)　類似的画像――写しの体系

この類似的画像は、画像とその対象である事物との間に「類似」している形式である。この類似性は、事物を表象化し絵として視覚的象徴として再構成したものである。この画像は、その姿の対象が事物に似ていると言うことである。

この抽象的画像は、事物を心的画像によって「描く」ことにおいて表現されたものである。この表現形式における抽象化は、写実的なものから抽象的なものまで多様な様式がある。写実主義、印象主義、抽象主義などの技法がある。そこには、さまざまな様式を持った「絵画の世界」が展開されている。

この抽象化は、事物の特徴との類似性を基礎とするものであり、それは、抽象のレベルの問題である。しかし、この類似的画像は、事物に似せて写し取ったものである。そして、この事実の写しは、送り手の「心的画像」を記号体系によって表現したものであると言うことができる。つまり、類似的画像は、「写しの体系」である。

(3) 論理的画像——記号の体系

この論理的画像は、事物に関する情報を象徴化して表現したものである。この象徴化は、事物を「図式」的に表現したものである。それは、記号的であり、抽象化のレベルが他の画像より高く簡潔化して表現したものである。そこには、対象としての事物の特徴的に抽象化して記号的に表現したものである。この記号性は、それ自身、意味を表現するものであることに特性がある。

この象徴化された画像は、対象としての事物の類似性を十分に表現しながら、それを象徴化し、記号化することによって表現したものである。この表象化の過程は、事物の情報を記号体系によって抽象化することであり、そこには、論理性が作用している。この論理の表現は、記号体系によって絵として表現することによって意味体系を持つことができる。それは、論理的画像や記号的画像と呼ばれる理由がそこにある。別の言い方をするならば、論理的画像は、絵によって意味が表現された情報体系であると言うことができる。つまり、それは抽象的図形の様式であると言える。

このような画像の本質は、それぞれの独自な特性を持っているばかりでなく、それらが相互に関連しながら個性化

されるとともに、総合化されることによって画像としての特性が強化されている。この特徴は、事物の写しと記録の差異にあると言うことができる。

二　画像としての記号体系

このように画像言語は、それを構成する記号体系として存在している。この記号体系としての画像は、画像を構成する単位、空間的配置や順序づけなどの絵画コードによって構成されている。次に、この画像は、象徴形式としての形象形式であり、それは、画像体系である。この画像体系は、絵画、写真、デザインなどの知識体系として存在していると言うことができる。

この画像としての記号体系と、それが創り出す画像体系とは、事物を絵画コードによって写すことによって構成されるものであり、それらは、一つの体系として存在するものである。記号体系は、表現方法として、画像体系は、知識体系としての性格を持つものであると言うことができる。前者は、画法としての画学であり、後者は、画像としての絵画、写真、デザインなどを対象とする画像学である。

（一）記号体系――絵画コード

画像は、絵画コードとしての記号体系によって構成されている。それは、事物を「写す」ことであり、写し方（画法）である。この記号体系は、画像の構成単位＋空間的配置＋順序づけ＋修辞＝姿であると言うことができる。それ

は、画像構成法であると言える。

(1) 画像の単位

この画像を構成する単位は、「点」であり、それは点の集合体としての有機体（システム）であると言うことができる。

この点は、画像を構成する最小単位である。画像は、この点から成り立っている。この点は、それが動くことによって「線」となり、動きの「方向」が生じ、また「形」を構成する。つまり、三角形、正方形、円形が生まれる。そして、この点は、その対象である事物に「光」が照らされることによって「明暗」「色」「奥行」「触覚的視覚的要素」などが存在している事物に対して、点は、その濃淡、色などによって構成することができる。これらは、画像を構成することにおいて、絵として一つに統合されシステム化されたものである。

(2) 空間的配置――統辞法

次に画像は、「点」が絵として構成されるためには、これらの単位が空間的に配置する統辞法がある。それには遠近法、黄金分割、ブレグナンツの法則などの構成法がある。そして、

(a) 対比　画像の体系として、明暗、色、形、大きさなどの対比の仕方がある。

(b) バランスとアンバランス　これには、対称と非対称、陽と陰、規則と不規則、簡潔と複雑、透明と不透明など、このほかさまざまな形のものがある。

このように画像言語の文法があり、画像として構成法である。[8] これに修辞法を加えることによって、送り手の心の働きのもとに統合されることによって画像体系が成立する。

（二）画像体系――視覚的知識

このような記号体系としての画像体系は、それが運ぶ視覚的知識の体系としての画像体系が形成される。この画像体系としての様式は、一つは歴史的な発展のなかにおいて、それぞれの時代において画像様式が発生し今日に至る歴史的様式がある。二つには、画像体系として写真、絵画、デザインなどの様式がある。

(1)　写真――写実の体系

画像としての写真は、事物をレンズを通して光学的な手法によってそれを再現し画像が構成される。対象の切り取り方と撮影の技術である。それは、「光」の画像体系であり、事物を「現実的」に再現するだけではなく、形や部分を誇張したり、様式化したり、モンタージュすることができる。この光による写真の体系は、写真の特性である。

また、この写真は、二つ以上のものを「組」にして特定の順序づけによって抽象的概念や物語などの知識体系を構成することができる。それは、画像としての「現実性」に対して「抽象性」「連続性」を付与した写真体系を構成することができる。

(2)　絵画――類似の体系

画像としての絵画は、描かれた事物の仮象である。送り手は、事物に対してある視点から面として切り取り、心的画像として記号体系によって表現したものである。それは、心の世界を画像体系としての絵という形象形式において表現した体系である。この絵は、さまざまな手法によって記号体系として構成されたものであり、具象的なものから抽象的な画像体系が存在している。この空間的な画像体系は、記号体系と色の世界であると言うことができる。

(3) デザイン——絵による象徴体系

画像としてのデザインは、事物についての情報を象徴形式によって記号化したものである。このデザインは、事物情報を視覚的に抽象化し記号的表現形式によって構成されるものである。この抽象化は、不必要な細部などを捨象することであり、この簡潔化された表現的手法によって成り立っている。このように象徴化された画像は、記号としての性格を持ち、それが指示する意味を表現できるものである。それは、抽象のレベルが高い形象形式であると言うことができる。

このように言語としての画像の本質について明かにしてきた。それは、「絵」としての総合体としての「形態」である空間体系である。この画像は、対象としての事物の「写し」としての記録されたものであり、それには、現実的、類似的、象徴的なものがある。この画像は、絵画コードとしての記号体系によって構成されるものである。そこには、写真体系、絵画体系、デザイン体系などの画像体系があり、それらは、知識体系であると言うことができる。

注

(1) Langer, S. K. *Philosophy in a New Key*. Harvard University Press. 1957.(S・K・ランガー著、矢野萬理ほか訳『シンボルの哲学』岩波書店、一九六〇年)
第四章「論弁的形式と現示的形式」。非言語は、象徴形式としての現示的形式であると論じている。それは、全体像としての類似性を言う。

(2) Ruesch, J. and Kees, W. *Nonverbal Communication*. University of California Press. 1956. 非言語は、言語、行為言語、事物言語との三つに分けている。画像は、類似的サインであると規定している。

(3) Morris, C. *Sign, Language, and Behavior*. Prentice-Hall. 1946.(チャールズ・モリス著、寮金吉訳『記号と言語と行動』

三省堂、昭和三十五年）画像は、画像記号（iconic sign）と考えている。
（4）Gibson, James J. The Theory of Picturial Perception. *AV Communication Review*. 2: 3–23, Winter 1954. 画像は、事物の「代理物（surrogate）」と規定する。
（5）Knowlton, James Q. On the Definition of "Picture." *AV Communication Review*. 14(2): 159–183, Summer 1966.
（6）Harrison, R. Nonverbal Communicaton. (Campbell, J. H. and Hepler, H. W. ed. *Dimensions in Communication*. Wadsworth. 1964.)
（7）Knowlton, J. Q. *op. cit.*
（8）Dondis, D. A. *A Primer of Visual Literacy*. MIT Press, 1973.（D・Aドンデス著、金子隆芳訳『形は語る』サイエンス社、昭和五十四年）